

## 招待発表

### 百合草若の物語の由来

The origin of the story of Yurikusa-waka

James T. Araki\*

Tsubouchi Shōyō in 1906 suggested that the medieval Japanese story *Yuriwaka Daijin* was an adaptation of the story of Ulysses. Although his thesis became well known, it has been discredited and dropped from standard references, particularly since its refutation by such preeminent scholars as Tsuda Sōkichi (history), Yanagida Kunio (folklore), Takano Tatsuyuki (theater), and Watsuji Tetsurō (philosophy). Tsubouchi's essay was not convincing because he relied only on an English translation of the *Odyssey* for purposes of comparison.

The story of Ulysses which became well known in Western Europe in the sixteenth century consisted of elements from the *Iliad* and *Odyssey* as well as poems of the Epic Cycle. A close comparison of the stories of Yuriwaka and Ulysses will show the presence of at least twenty-three parallels in approximately the same order of occurrence. It would be difficult indeed to insist that the two stories share coincidental similarities.

Because *yuliseez* is a recent English pronunciation of

---

\* James T. Araki ハワイ大学教授

Ulysses, its similarity with Yuriwaka may be considered coincidental; for the name Yuriwaka was known in Japan in the 1550s. However, Europeans who had studied Latin in the sixteenth century would have pronounced Ulysses as either *ulikses* or *üliks*—those who had studied in Paris, as St. Francis Xavier had, would probably have preferred *üliks*, which would have registered as *yurikusu* in the Japanese ear. The similarity between *yurikusu* and *yurikusa*, the probable original reading of the Japanese hero's name, is striking.

If we may assume that the story of Yurikusa-waka is basically an adaptation of the story of Ulysses, with additional motifs taken from the Buddhist story about Prince Zenyū (*Tripitaka*) and other Japanese folk tales, we may then proceed to attempt to answer the question posed by Tsubouchi: "When and by whom was the story of Ulysses transmitted to our country?" The only likely transmitter known to us is a certain member of Xavier's party, which arrived in Yamaguchi in November of 1550 (solar calendar). A story title "Yuriwaka" was narrated in Kyoto on February 10, 1551.

One means of determining when and where the story was transmitted to Japan would be to ascertain when and in what ways the long-forgotten story of Ulysses was revived in Western Europe. This paper will focus on the status of the Homeric epics, the story of Ulysses in particular, in Western Europe during the Middle Ages and the Renaissance.

『ゆりわか大臣』と題する室町時代の幸若舞曲は、1550年2月10日(太陽暦、以下同じ)に京都の芸能人によって演じ語られた、と史料に述べられている。<sup>(註1)</sup>江戸初期には華麗な奈良絵本、絵巻で物語化され、主人公のゆり若も物語の英雄としてかなり人気があったようである。ギリシャの古典を嗜むものが読めば、ただちにユリシスの物語を連想する。必ず連想すると云った方が正しい。英文学に精通した坪内逍遙氏は、1906年に発表した論文で『ゆりわか大臣』はユリシスの物語の翻案であると述べた。<sup>(註2)</sup>坪内氏が指摘した8項目の類似点は順序が整然としていなかったために、2つの物語が偶然に似ていると云われないでもなかった。また、メソッドの面にも、後世の浄瑠璃、近松門左衛門の『百合若大臣野守鏡』の人物を比較の対象にするという欠陥があった。しかし、次の3項目の類似は確かに奇異を感じさせられるものがあった。

1. 帰郷した主人公は肉親にも見間違えられるほど変っている。
2. 忠実な家来は主人公が自分の主人であるとは知らないが、優遇する。
3. 主人公は他の者が張れない強弓を張って名乗りを上げる。

坪内氏の感は当たっていたのだがギリシャの神話、叙事詩に詳しくなかったので、読者を説得できる程度の論説は不可能であった。アレキサンダー・ポープの『オデシー』の英訳に基づいた比較研究であつたらしく、徹底した比較でなかった処に説得力が欠けていた。それ故に、津田左右吉、柳田国男、高野辰之と云った歴史学、民俗学、演劇史の各権威が揃って疑いを示したことは当然だと云える。殊に和辻哲郎氏の反論は坪内説には致命的であった。と云うのは、和辻氏はホメロス叙事詩研究の権威だったからである。和辻氏は坪内説を容易に肯定できたはずでありながらわざわざ手痛い否定説を発表したのは全く不思議である。先学井上哲二郎の学者としてのポーズを快しとしなかった和辻氏は、学界、演劇界に君臨した坪内氏をも快しとしない何かがあったのか、と云う疑いすら感じ取られる。

ユリシスの物語は、ホメロスの『オデシー』と『イリアド』、とそれ以外の『エピック・サイクル』と名付けられた一連の古代詩の素材をも総合した物

語である。『ゆりわか大臣』の物語との詳細な比較を試みれば、類似点は少なくとも23項目に及び、しかも配列が整然としているので、似たような物語が日本で偶然に発生したとは云いがたくなる。以下に類似点の比較表を掲げる。

## A COMPARISON OF SIMILAR MOTIFS IN THE STORIES OF YURIKUSA AND ULIXES

### 百合草若の物語

### ウリクセスの物語

1. 左大臣きんみつは観音に悲願して、申し子を受ける。  
ウリクセスの祖父オートリクスが再度神に孫が授かるように祈ったと述べられる。[*Odyssey*: XIX.]
2. 主人公は百合草若と名付けられる。作者が「ユリクサ」と読む意図であったのであれば、類似を指摘するのにはより都合よい。  
16世紀のヨーロッパ知識人の間では、主人公のラテン語名 Ulixes が普及しており、日本人はウリクセスあるいはウリクサスと発音したはずだ。ユリクスという発音も可能だった。
3. 神達は高天原に集会して百合草若を蒙古征伐の大將に任ずる。  
オリンパス山上の神々はしばしば集会して人間界の事柄を評議する。[*Iliad, Odyssey: passim.*]
4. 神の意志は巫子を通して神託の形で内侍所に知らされる。  
アポロの意志は夢の判断師のチャルカスを通してギリシャ人に知らされる。[*Iliad*: I.]
5. 住吉の神馬を毒矢で射た蒙古の大將を討つべく、船八万隻で唐土に向う。  
ヘレンの誘かい者パリスを討つ為めに、ギリシャ軍は千隻の船でトロイに向う。[*Epic Cycle.*]
6. 御台所は同行したが、百合草若はおしとめる。  
ウリクセスは妻ペネロピをイタカに残して行く。「イリアッド」のギリシャ將兵は禁欲を守った。[*Epic Cycle.*]

(“Epic Cycle”の定義：ホームロスが使用しなかった、トロイ戦争に関する周知の題材を含む、一連の古代詩)

7. 海上で向いあったまま3年過ぎてしまう。  
陸と海に分れ、停とんした状態で9年過ぎてしまう。[Epic Cycle. *Odyssey*, V.]
8. 百合草若は19人の小軍勢で敵4万隻を攻め、大戦争の緒を開く。  
ウリクセスは小人数で木馬の中に隠れ敵地に入り、大軍を市内に導く。[Epic Cycle. *Odyssey*: IV, VIII.]
9. 快勝の後、船で筑紫への帰途につく。  
快勝の後、船でイタカへの帰途につく。[Epic Cycle. *Odyssey*: *passim*.]
10. 百合草若が玄海島に降りて3昼夜眠っている間に別府兄弟にその無人島に置き去りにされる。  
ウリクセスは船上で死に入ったように眠り、眠ったまま浜に下され、目が覚めたら未知の無人の土地にいた。[*Odyssey*: XIII.]
11. 兄の別府は百合草若の御台所に心を寄せ、結婚を強制的に求める。  
心無い求婚者が大勢ウリクセスの留守宅に押し掛けて、妻ペネロピに夫を選ぶことを要請する。[*Odyssey*: I.]
12. 御台所は、宇佐八幡に千部の経を書き読む大願成就の暁には、と逃げ口をつくる。  
ペネロピは、ウリクセスの父の来たるべき葬祭の為に編みかけた衣をすますまでは再婚できないと言い張る。[*Odyssey*: II.]
13. 百合草若の秘蔵の鷹、緑丸は玄界島に飛んで行き、主人の生存の旨を御台所に伝える。  
アテネはオリンパス山上よりイタカに飛び下り、ウリクセスの息子に父が孤島で生きながらえていると伝える。[*Odyssey*: I.]
14. 孤島で3年過ごした時点で神の助力で漁船があらしに遭い、玄界島に漂流して、百合草若を救う。  
ウリクセスはカリプソの島で7年捕われていたが、神々はウリクセスを島から逃がすようにカリプソに命じる。[*Odyssey*: V.]
15. 百合草若は喜びの余り、漁夫達にすべてを打ち明けたいののだが、用心の為に偽りを述べる。  
イタカに戻ったウリクセスは始めて出会った人間に自分の身分を隠すために偽りを述べる。[*Odyssey*: XIII.]

16. 百合草若は身体が縮み、やせ衰え、こげがむし、だれ1人見知るものがない。  
ウリクセスはアテネの魔法で身体はしぼみ、顔はしわが一杯で、だれ1人見知るものがない。  
[*Odyssey*: XIII.]
17. 門脇の翁夫婦は百合草若が主人であることを知らずに面倒を見、主人が戦争で死んだ悲しみをもらす。  
羊飼いのオイマエウスはウリクセスを客人として待遇する。主人であるとは知らず、ウリクセスが帰郷しなかった悲しみを語る。  
[*Odyssey*: XIV.]
18. 別府はしびれを切らして御台所の殺害を企てるが、百合草若は尚身分を隠し続ける。  
ペネロピの昼編んで夜ほごす策略が発かれて危機がせまるが、ウリクセスは尚身分を隠し続ける。  
[*Odyssey*: XIX.]
19. 百合草若は自分の鉄の弓を手易く張り、自己たることを証明する。  
ウリクセスは求婚者達が張れなかった強弓を手易く張り、自己たることを証明する。[*Odyssey*: XXI.]
20. 百合草若は兄の別府を殺し、弟を島流しにする。  
ウリクセスは求婚者達の逃げ道を閉ざし、皆殺しにする。[*Odyssey*: XXII.]
21. 唯一の極悪人の別府の大夫は「高手小手にいましめ、かかりの松に結びつけ」、百合草若は別府の「舌をつかんで引きぬいて、彼処へがばと投げ棄て、首をば七日七夜に引首にこそせられけれ。」  
極悪なメランシウスだけは腕、脚を身体の後ろに縛しめられ、性器は引き抜かれて、犬に投げやられた拳句、手足を切断される。ホメロスの叙事詩にはまれな残酷な描写である。[*Odyssey*: XXII.]
22. 復しゅうがすんで、御台所は始めて百合草若が帰省したことを知る。  
復しゅうがすんで、ペネロピは始めてウリクセスが帰省したことを知る。[*Odyssey*: XXIII.]
23. 百合草若は都に上り、父母と再会する。  
ウリクセスは父を探す為イタカを去り、再会する。[*Odyssey*: XXIV.]

私は、やや一方的な私見だと見做される懸念はあったのだが、坪内説を肯

定する論説を一応英文で試みた。<sup>(註3)</sup> 要は、『ゆりわか大臣』はユリススの物語の翻案であり、「ゆりわか」の名称は「ユリスス」のもじりであるという説を肯定し、更に坪内氏が提出した質問、「百合若物語は……………いづくの国人より、いつごろ我が国に伝へたりけん」、の回答を試みた。つまり、ユリススの物語は1550年の11月頃山口において、ザビエル神父の通訳のファン・フェルナンデズ (Juan Fernandez) 神父によって語られ、山口滞在中の幸若舞曲の演者がその物語に基づいて『ゆりわか大臣』を書き、ほぼ3ヶ月後、翌年の2月10日 (西暦) に京都で演じ語った、と仮定したのであった。主として西欧側の史料を基として成り立った仮定である。

英論文は村上学、角田一郎、岸辺成雄諸教授に読んでもらい、仮説について有益なサジェスチョンをいただき、また西欧から見た側面を更に詳しく調べた上で修正した。その結果を日本の研究者に批判していただき、日本から見た側面のゆがみを直してから論説を修正、或は訂正することが今回の発表の意図である。

主人公の名前、「ゆりわか」と「ユリスス」との関連のポジビリティは大いにあると思われる。金関丈夫氏は、「天文 (1532~1554年) 当時の記録では、幸若の若衆には、花若あり後には藤若ありで、別に百合若があっても不思議はない」と云う意見であるが、それは意見のみとして止まる。<sup>(註4)</sup> 坪内氏は、比較の対象としてオデセウスの英訳名「ユリスス」を使用したのが、ホメロス叙事詩の英訳ができたのは日本の室町期以後であり、英語圏内で普及したのは1726年出版のポーブ訳であるので、坪内氏の比較は比較年代誤差という理由で無効とされても致し方ない。両物語の主人公の名前の、1550年辺りの発音をまず確かめなければならない。

1500年以降の西欧におけるラテン語の普及は、現代日本での英語の普及を問題なく凌ぐほどめざましいものであった。大学ではあらゆる学科の講座はラテン語で行われ、1559年に著名な法学者のジャン・ボダン (Jean Bodin) が「フランス人の教育はフランス語で」と公的に嘆願したことは有名である。

1600年頃ドイツを遍歴したイギリス人の筆記によれば、賤しい階級まで含むあらゆるドイツ人がラテン語をある程度習得していたそうである。<sup>(註5)</sup>ドイツ語本よりはラテン語本の出版部数が多いという状態は18世紀近くまで続いた。<sup>(註6)</sup>

ザビエル神父がパリ大学で受けた大学教育は勿論ラテン語の読み書きを通しての教育であった。聖書の研究よりもギリシャ・ローマの古典研究に熱中したルネサンス期の学生たちはホメロスの叙事詩に精通していたはずだ。印刷が発達し、ホメロスのギリシャ語版は1500年前後より版数を重ね、ラテン語完訳も1520年代より版を重ね、<sup>(註7)</sup>広く普及した。ユリシスはラテン語では Ulyxes であり、正当とでも云える発音は *ulikses* (ウリクセス) であったが、16世紀のフランスの学者は *üliks* (ユリクス) と発音したはずだ。それより何百年も前に語頭の 'u' は *ü* と発音されるようになり、筆記文字の語尾の '-es' は無音声化していた。

ザビエルは日本語は殆んど話せなかった。ユリシスの物語を容易に語れたのはザビエルの補佐兼通訳のファン・フェルナンデズ神父であった。フェルナンデズは印度のゴアで日本語を習い、鹿児島で1年以上通訳を務め、コズメ・デ・トレズ Cosme de Torres 神父がスペイン語で綴った説教を全部日本語に訳しており、<sup>(註8)</sup>それから山口に赴いた。フェルナンデズの学歴は分らない。スペインでラテン語を学んだのなら、多分「ウリクセス」の発音を使用したであろうし、フランスの教育を身につけていたのであれば「ユリクス」と発音したであろう。「百合草」が「ユリクサ」の表記であったとすれば問題は片付くのであるが、この点が不明なのである。

『古事記』の「神武天皇記」の終りにある「山由里草」は「ヤマユリグサ」と読まれた。『俳諧新撰』の雑部には「うつぶくは百合草なれば案じ草」という句があるが、「百合草」と「案じ草」の対句を中心とする発句である。しかし、確かな証拠は幸若舞曲に求めなければならぬ。舞曲の正本で最も古いとされている大頭左兵衛本の『大臣』では「百合草若大臣」、「百合草大臣」、「ゆりわか大臣」と、3通りになっている。<sup>(註9)</sup>内閣文庫の江戸初期の写本では終始、



ルビ無しで「百合草若」或は「百合草若大臣」であり、同系統の『舞の本』の寛永写本も同様である。毛利家本(元和3、1617年写)は、『百合草若大臣』の題がある。<sup>(註10)</sup>その他、室町末期の謡曲『百合草若』には、「百合草若」と「百合若」と両方記されており、後の百合若説経の題名は『百合草若大臣記』である。この物語に関する最古の史料、『言継卿記』の西暦1551年2月10日の条には「ゆりわか」と仮名で記されている。<sup>(註11)</sup>「ユリクサワカ」が余りにも突飛に聞えた故に筆者が「ユリワカ」と記した、とでも言いたいのだが、それは独り善がり過ぎる解釈とされるであろう。しかし『俳諧新撰』の撰者が「ユリグサ」の読みを避けられるように「百合草なればなり」と小書きで「なり」を付け加えたことを示しておきたい。<sup>(註12)</sup>

内的本文証拠 (internal textual evidence) について考えて見たい。内的証拠それ自体は必ずしも説得性を有するものではないが、他の外的証拠を確証する役割を果せるものである。『ゆりわか大臣』の物語が高潮に達する場面は七五調で書かれている。しかし、「いにしえしまに、すてられし、ゆりわか、だいじんが、いまはるくさと、もえいずる」の1節では、七文字であって欲しい第3フレーズが「ゆりわか」と4文字になっているが故にリズムが砕けてしまう。却って「いにしえしまに、すてられし、ゆりくさわかの、だいじんが、いまはるくさと、もえいずる」の方が至って自然に流れ、この読みによって表われる「百合草」と「春草」の対句も作者の意図であったのだろうとっていいほど自然である。内閣文庫では、この第3フレーズは「百合草若大臣が」と記されている。室町時代の辞書類では「百合草」の名詞には「ユリ」の訓がついている、という村上氏の御指摘はありがたかった。「百合草」という名詞(訓は一応ともかくとして)の記載が天文(1532~1554年)以降に限られている場合は、「ユリクサ」説は肯定されたとしていいであろう。

ユリシスの物語の日本への伝承について簡単に述べて見たい。ユリシスの物語は主としてホメロスの『イリアド』と『オデシー』に拠るものである。しかしそのラテン語訳を通読するのは容易ではなかった。ホメロスが詩で

語った雄大な物語を日本語に不自由な外国人が果して語れたか、と云う疑問が生じるのは当然である。しかし、多少教育のある16世紀中期の西欧人はユリススの物語の粗筋を教科書程度のラテン語本で読んで知っていた。ローマ時代にヒジヌス Hyginus がラテン語で書いたギリシャ神話・英雄物語の要約はその一例である。<sup>(注13)</sup> ヒジヌスの本は1535年にスイスで出版されており、神々の争い、トロイ戦争、ユリススの冒険は読み易いラテン語で20ページ位に要約されている。ラテン語を二、三年勉強した生徒なら30分で読めたはずであり、徒然に語るのには手頃な物語である。

西欧では、15世紀には忘却されていたユリススの物語は16世紀の中頃には一般に普及していた。それを日本に伝えたのは西欧人だったと見做すのが最も妥当だと思う。ポルトガルの船人は1542年以降、時折九州を訪れている。その中で教養があったと思われる、船長のホルヘ・アルヴァレス Jorge Alvarez は1547年に薩摩半島の南端の山川に寄港したが、行動は港より15キロの範囲に限られ、通訳も不充分であったらしい。物語の伝承者はやはり1549年8月10日に鹿児島に到着したザビエル一行の何者かであったと思われる。フェルナンデズ以外に、ゴアでポルトガル語を習得した、鹿児島出身のヤジローも考えられる。伝承の場所は鹿児島とされてもよいのであるが、山口であったと思える理由は二つある。(1)後になって派生したと思われる各種の百合若伝説は薩摩ではなく、関門地方に点在する。(2)幸若舞の舞手はその頃守護大内義隆の前で舞を演じたと『陰徳太平記』に記されている。『陰徳太平記』は江戸期の通俗史で間違いもあり、信頼性は薄いのであるが、その当時貴人や芸術者が京都・山口間を頻繁に往来したことは事実である。片道二、三週の旅であった。ザビエル一行も上京したのだが、畿内では雨が降れば木陰で立ちつくすという極く惨めな滞在であり、物語りに耽る機会は全くなかった。

終りに、ユリスス（ギリシャ）、善友太子（印度）、とゆりわか（日本）の物語の三角関係に触れてみよう。金関氏にヒントを得た、前田淑氏の百合若大臣と『報恩経』の善友太子の物語の比較は割合整然としており、ゆりわか

の物語の成立を考える上では有益な参考となった。<sup>(註14)</sup>津田左右吉氏もかつて提言したように、ギリシャ兼ローマ文化と大乘仏教文化とがガンダーラで合流し、相互に影響しあったらしい、ということを感じ起こした。アジアの仏教圏内にはユリシスの物語に似通った説話が点在するそうだが、川喜田二郎氏がネパールから持ち帰った「カール・パーキュー」Khār Phākṣyēの物語はそのいい例である。<sup>(註15)</sup>『大蔵経』に収められている善友太子の物語もその1例である。

ゆりわか物語はユリシスの物語の翻訳ではなく、翻案である。翻案のプロセスには必然である潤色がなされた。その結果、日本では仏教説話化した善友太子物語から四つの一連したモチーフが加えられ、日本伝統の「身代り」その他のモチーフをも交ぜた日本の物語ができたものと思われる。<sup>(註16)</sup>

#### 附記(1)

一般の欧米人は、ユリシスの物語は古代より読み語り続けられた物語だと思っているが、これは先入観である。そうではなかった、と専門家に教えられて私も驚いた。それ故、ルネサンス期以前にはトロイ戦争談とユリシス漂流談はどの程度知られていたかと云う質問が生じる。

西欧では、トロイ戦争に関する知識はベヌア・ド・セントモールの『トロイ物語』(12世紀)と云うフランス語の物語詩とそのラテン語散文訳(13世紀)の内容に限られていた。<sup>(註17)</sup>『トロイ物語』はディクティーズ(2世紀前後)とダールレス(6世紀)の書いた2冊のトロイ戦史のみに基づいているので、ユリシスについては殆んど書かれていない。<sup>(註18)</sup>チョーサーの『トロイルとクレセデ』(1380年頃)の場合も同じである。オヴィッドの物語集(1世紀)は広く親しまれた本であるが、ユリシスの戦争後の冒険には触れていない。

中世期の学者はホメルスを読んだとされているが、彼等が実際読んだのはホメルスの詩ではなく、『イリアス・ラティーナ』と云う、『イリアド』を15分の1位に縮めたラテン語訳であり、それにはユリシスは殆んど出て来ない。ヒジヌスの要約を読んだ学者はいたかもしれない。<sup>(註19)</sup>読んだとすれば極く稀な

写本であった。1535年に印刷された9世紀の写本は伝わっていない。しかし、ユリシスは中世に於て全く忘れ去られた訳ではなかった。稀に修道院の壁画に、キリスト教に関連するモチーフと云う形でえがかれている。<sup>(註20)</sup>

#### 附記(2)

ユリシスの物語が16世紀以前に日本に伝えられた形跡は全くない。マルコ・ポーロは燕都で何年か過ごしたのだが、彼はビザンティン文化を身につけていなかった限りはユリシスの物語を知るすべはなかったはずである。ビザンティン帝国、特にコンスタンチノーブル、ではギリシャの古典は尊重せられた。ビザンティンより日本へと云う経路も考えなければならないのだが、それはその方の専門家に任せることにしよう。

#### 附記(3)

類似表の第20と21項目（復讐の段）については、ユリシスの物語からヒントを得たと云える程の類似性がない、と和辻氏は述べられたが、<sup>(註21)</sup>メランシウスの処刑と別府のそれとは不思議な程似ている。別府は舌を引き抜かれ、メランシウスは性器を引き抜かれる。原典の動詞は *exerusan*（引き抜く）であり、名詞は直訳すれば原典では (*mēdea*)「性殖器官」であり、ラテン語訳、英語訳では「陰部」か「恥部」のいずれかである。

西欧では、他人相手には口から出す可からざる単語であり、特に神父がこの場面を物語ったのであれば自ら「舌」に変えたであろう。『オヴィッド』の、テレウスが義理の妹、フィロメラの舌を引き抜いた説話は余りにも有名だったからである。この場合のモチーフの違いは、社会言語学の角度から見れば、違っているからこそより忠実な伝承だとも云える。日本では、何時頃から舌を引き抜く風習が広まったか、知りたいものである。

#### 附記(4)

「東勝寺鼠物語」では「ゆり若大臣」を天文6年（1537年）と関連付けている。その江戸後期の写本の創作年代とストーリーの時間的背景とを混同すべからざることについては已に述べている処である。<sup>(註22)</sup>

注

- 1 『幸若舞曲集』、第1巻、75ページ。
- 2 「百合若伝説の本源」、『早稲田文学』、第3期、1号、134～143ページ。
- 3 “Yuriwaka and Ulysses: The Homeric Epics at the Court of Ōuchi Yoshitaka,” *Monumenta Nipponica*, Vol. XXIII (1978), pp. 1-36.
- 4 『木馬と石牛』(増訂版)、52ページ。
- 5 E.R. Chamberlain, *Everyday Life in Renaissance Times* (New York, 1965), p. 178.
- 6 Gilbert Highet, *The Classical Tradition* (London, 1949), p. 114.
- 7 *British Museum Catalogue of Printed Books*.
- 8 Georg Schurhammer, S.I., & Joseph Wicki, S.I., ed., *Epistolae S. Francisci Saverii*, II (1549-1552), (Rome, 1945), pp. 261, 276.
- 9 『幸若舞曲集』、第1巻、506ページ、第2巻、51～72ページ。
- 10 『幸若舞曲集』、第1巻、361ページ。
- 11 『幸若舞曲集』、前出。
- 12 『国民文庫』、第6巻、372ページ。
- 13 *Fabulae*, ed. by Micyllus (Basle, 1535). Also, *The Myths of Hyginus*, tr. by Mary Grant (University of Kansas Press, 1960).
- 14 「幸若舞曲『百合若大臣』と報恩経——百合若文学成立に関する一試論——」、『季刊文学・語学』、第9巻、12号、94～100ページ。
- 15 Kawakita Jiro, *The Hill Magars and Their Neighbors* (University of Tokyo Press, 1974), Vol. III, pp. 118-126.
- 16 善友太子について詳しくは前出の拙稿を御参照願いたい。
- 17 *Roman de Troie* by Benoit de Sainte-Maure; *Historia Trojana* by Guido delle Collone. George Philip Krapp, ed., *Troilus and Cressida* by Geoffrey Chaucer (Random House, 1922), p. viii.
- 18 Henry Osborn Taylor, *The Classical Heritage of the Middle Ages* (New York, 1911), p. 41. Also, R.M. Frazier, Gr., *The Trojan War: The Chronicle of Dictys of Crete and Dares the Phrygian* (Indiana University Press, 1966), pp. 10-13, 122-123.
- 19 Ernest Robert Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages* (London, 1953), pp. 49-51.
- 20 前出、Taylor, p. 353.
- 21 『和辻哲郎全集』、第1巻、378ページ。

### 討議要旨

中村忠行氏より、室町物語の「天稚彦物語」の系統にギリシャ神話の「エロスとサイキ」の物語の翻案と思われるものがあり、どういう経路で入ってきたか不思議であったが氷解した思いがする。イソップの伝統は明代の中国語訳から入った形跡はあるが確証はなく、天草版以前にザビエル一行が毛利家に滞在した折にでも聞いていたのではないか。元就の有名な3本の矢の話はイソップにあるとの発言があり、発表者より百合草若は天文頃上演され、それ以前に入ってきた形跡はなく、中国から入った形跡もないようだとの発言があった。山下宏明氏より、百合若の名前の意味、関門地方に集中して百合若伝説のある理由、幸若舞曲が農村の土俗的な語りの中から生まれたもののみでなく外から持ち込まれたものを語り物化していることなどの点についての発表者の示唆は有益であったが、指摘された個々のモチーフについては潔癖に考えるべきで、土俗芸能から持ち込んだものもあるのではないかと、その発言があり、発表者より、類似1つだけを抜き出してみると偶然なものがあるが、中に四つも五つもユニークなものが出てくれば、これは怪しい。また順序をごちゃごちゃにして無理にマッチさせると危険であり、順序が整然としていることにより厳密さが増すのではないかの発言があった。